苦難といかに向き合うか

インドネシア・アチェ津波記念行事にみられる神義論

日本学術振興会特別研究員（PD）　福田雄

1　目的

記念行事は、ある集団に過去の出来事にかんする特定の意味と価値を与える社会的実践である（Connerton 1989=2011）という。本報告は、インドネシア・アチェのスマトラ島沖地震をめぐる記念行事において 2004 年の津波にいかなる意味が与えられているのかを考察することを目的とする。スマトラ島沖地震最大の被災地であるインドネシア・アチェ州は、世界最大のムスリム人口を誇るインドネシアのなかでも、唯一イスラーム法シャリーアが自治法として制定されている特別州である。かかる地域の津波記念行事における災禍の宗教的意味づけを、苦難の神義論という観点から解釈することを試み、またその意味づけがどのような文脈に支えられているのかを考察する。

2　方法

2014 年から 2016 年にかけてインドネシア・アチェ州バンダアチェ市で実施したフィールドワークで得られたデータをもとに上記の問題を考察する。個人の語りや神学的論争、インターネット上の言説を主たる分析対象としてきた従来の研究を踏まえた上で、本研究は公式の記念式典における儀礼や語りを検討する。主たる分析対象は、震災の翌年以降アチェ州が実施する公式の津波記念行事、とりわけ 2015 年の 11 周年津波記念式典における儀礼や語りである。

3　結果

スマトラ島沖地震をめぐる津波記念式典における儀礼や語りは、アチェのイスラーム文化によって最もよく特徴づけられる。そこでは未曾有の災害の背後に神の智慧を措定したうえで、亡くなった者には死後の救いを約束するとともに、生き残った人々には信仰を新たにする機会として、苦しみを意味づける弁証論が語られた。こうした語りのリアリティはしかしながら、神学的言説とは区別されるアチェにおける悼みの日常的文脈に基礎づけられている。「強く敬虔なアチェ人」というアイデンティティを形作る日常生活における諸実践がこうした災害理解を支える一要素であると考えられる。

4　結論

以上から、アチェの津波記念式典を苦難の神義論という観点からある程度解釈可能であることが示された。しかしながら、津波の語りにおける「救い」のリアリティは、知識人層を主たる担い手とする神学的言説によってのみ支えられているわけではない。苦難からの救いにかんするリアリティは、神を弁護するためのこれらの神学的思弁にではなく、むしろ人間が苦難を受け入れるための日常に根づいた実践的方向づけにこそ基礎づけられるのである。

文献

Connerton, P., 1989, *How Societies Remember*. Cambridge University Press. （=2011, 芦刈美紀子訳『社会はいかに記憶するか—個人と社会の関係』新曜社）

Simko, C., 2012, "Rhetorics of Suffering: September 11 Commemorations as Theodicy." *American Sociological Review* 77(6):880-902.

Weber, M., 1921, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie: Das antike Judentum*. Tübingen: J.C.B. Mohr (P. Siebeck).（＝1972, 大塚久雄・生松敬三訳『宗教社会学論選』みすず書房）